

まちづくり
実践レポート

～北から南から～

「写真の町」を宣言して34年 フォト・フェスタや写真甲子園で 国内外の注目を集めると同時に 町民全体で“写真映りのよい町”を追求



北海道東川町



東川町国際写真フェスティバル

北の大地・北海道のほぼ中央部に、「写真文化首都」を掲げるまちがある。1985年に「写真の町」を宣言した東川町。内外の写真家を表彰する「写真の町東川賞」授賞式とその作品展をメインとする東川町フォト・フェスタ（正式名称＝東川町国際写真フェスティバル）は、宣言の当初から毎年開催され、2018年に第34回を迎える。高校生を対象とする「写真甲子園」も四半世紀の歴史を数え、昨年はこの大会を題材とする映画「写真甲子園 0.5秒の夏」が公開されるまでに成長した。

ただし、「写真文化首都」の意味するところは、単にこうしたイベントが発展・定着したことだけではない。“写真映りのよい町”であり続けるためにどうしたらいいかを町民全体で考え、自然環境や景観の保全、自然と文化が調和した暮らし方を追求しているのだ。こうした取組みの成果か、一時7000人を切った人口は1995年から増加傾向へ転じ、現在では約8300人に。交流人口も増え、中心部には飲食店が次々にオープンするなど、活気にあふれている。



「写真の町」を宣言した東川町（1985年）



観光協会の提案をきっかけに 写真によるまちづくりが始動

東川町は、日本最大の国立公園・大雪山国立公園のエリア内に位置し、北海道の最高峰・旭岳（標高2291m）を擁する。旭岳温泉、天人峡温泉といった温泉にも恵まれ、登山やウィンタースポーツを楽しむ人々も含め1年を通して観光客が絶えない。

また、旭川市に隣接しており、町の中心部から旭川空港まで約8km、旭川駅まで約15kmとアクセスも良好だ。

そんな東川町が写真によるまちづくりに取り組むことになった背景について、同町写真の町課の矢ノ目俊之課長はこう説明する。

「宣言をした1985年当時、一村一品運動が脚光を浴びていて、特産品によるまちづくりが全国各地で進められていました。東川町には何があるか考えてみると、温泉、大雪山、農業では米、工業では家具・工芸……、などが挙げられるものの、町全体を網羅する町づくりが必要でした。例えば温泉は潤っていたけれど、それだけにとどまっていて広がりがいい。サービスも含めてもっと活性化しないと、いずれ立ちいかなくなるという危機感が、一部で高まっていたのです。」

また、1984年は東川町の開墾が始まってから90年という節目の年。100周年に向けて、後世に引き継いでいく町の未来をどのように思い描くか、考えるのにちょうどよいタイミングでもあったのだ。

そこで観光協会から町に提案されたキーワードが、「写真」だった。大雪山国立公園を中心とする町の大自然は、以前からネイチャーフォトの格好の被写体となっており、プロアマ問わず多くの写真家が訪れていた。写真によるまちづくりの提案に当時の町長も賛同し、札幌市で企画会社を経営し自らも写真家であるという人物に相談。一緒にその具体化を考える中で、「写真映りのよいまちづくり、人づくり」というコンセプトが固まっていった。

写真映りのよいまちづくりとは、例えば、農村の田園風景や自然景観を守っていくこと、そうした景観にマッチした建物にすることなど。人づくりとは、いつも笑顔が絶えない、おもてなしの心に満ちた人を育てることなど。

こうして、1985年の6月1日、「写真の町宣言」を行った。この日は公益社団法人日本写真協会によって、「写真の日」と定められている。

世界の人々に開かれた町を目指し 世界に向けて写真の町を宣言

格調高い「写真の町宣言」を、次に全文紹介する。

「自然」と「人」、「人」と「文化」、「人」と「人」／それぞれの出会いの中に感動が生まれます。／そのとき、それぞれの迫間に風のようにカメラがあるなら／人は、その出会いを永遠に手中にし／幾多の人々に感動を与え、分かち合うことができるのです。／そして、「出会い」と「写真」が結実するとき／人間を謳い、自然を讃える感動の物語がはじまり／誰もが、言葉を超越した詩人や／コミュニケーションの名手に生まれかわるのです。／東川町に住むわたくしたちは／その素晴らしい感動をかたちづくるために／四季折々に別世界を創造し／植物や動物たちが息づく／雄大な自然環境と／風光明媚な景観を未来永劫に保ち／先人たちから受け継ぎ、共に培った／美しい風土と、豊かな心をさらに育み／この恵まれた大地に、世界の人々に開かれた町／心のこもった“写真映りのよい”町の創造をめざします。／そして、今、ここに、世界に向け／東川町「写真の町」誕生を宣言します。

宣言の中で特に注目されるのは、1つには先人から受け継いだ風土を守り育て、次代に残していこうという、今でいえば「持続可能性」とも表現できるコンセプトを先取りしていることだ。そしてもう1つは、「世界の人々に開かれた町」を目指し、「世界に向け」で宣言していること。写真というメディアあるいはアートが、言語を媒介とせず国境を越えて心を結びつけられる特性を有していることを、まちづくり・人づくりにも最大限に活かそうというねらいが感じられる。

国内外の作家を対象に5部門で 「写真の町東川賞」受賞者を選定

町では早速、この宣言の具現化に取り組み始めた。そして、「写真の町」東川を内外にアピールできる旗印となるような事業をやろうということで始まったのが、東川町国際写真フェスティバル（通称：フォト・フェスタ）だ。1年間の活動の集大成という位置づけで、毎年夏に開催されている。開催期間は約1か月で、中でも7月末の1週間ほどをメイン会期に設定。この期間はさまざまなイベントが盛りだくさんだが、なかでも目玉となっているのが「写真の町東川賞」の授賞式だ。

同賞は基本的にプロのカメラマンを対象とするもので、現在は海外作家賞、国内作家賞、新人作家賞、特別作家賞、飛弾数右衛門賞の5部門がある。海外作家賞は、世界をいくつかの地域に分割して年ごとに対象地域を変え、当該地域在住の作家をノミネートする。審査員を務



高校生国際交流写真フェスティバル

めるキュレーターや写真家が現地へ調査に出向き、関連団体などから情報収集して、作家をリストアップしているという。昨年の第33回では、21人がノミネートされた。

国内作家賞及び新人作家賞は、発表年度を過去3年間でさかのぼり、写真史上あるいは写真表現上、未来に意味を残すことのできる作品を発表した作家を表彰する。特別作家賞は、北海道在住または出身の作家、あるいは北海道をテーマ・被写体とする作品を発表した作家が対象。

飛弾数右衛門賞は2010年から新設された部門で、長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け、地域に対する貢献が認められる方を表彰するものである。飛弾数右衛門は東川町の元職員で、この町の歴史や文化を後世に残そうとコツコツ写真を撮りためていた。その作品が認められて前述の特別作家賞を受賞したことから、彼の功績を称えて新たな賞を設けたというわけだ。

ノミネート作家のリストアップに際しては、全国で約500人ものノミネーターと呼ばれる協力者の存在が大きい。美術館・博物館のキュレーター、写真館の経営者、写真業界関係者などがノミネーターになっている。彼らによって推薦された作家・作品を、町が委嘱した委員で構成する審査会で厳正に審査し、各部門1名を選出する。そして、前述のとおりメイン会期中に受賞者を招いて表彰式を行うとともに、受賞作品展や受賞作家による記念シンポジウムなども実施する。

屋内外を問わず町全体が ギャラリーや交流の場に

フォト・フェスタでは、写真の町東川賞関連イベント以外にも、メイン会期を中心に多彩な催しが開かれている。写真甲子園もその1つだが、これは後に詳述するとして、2017年の第33回フォト・フェスタで行われた他の主な催しを、以下に列挙する。

- 赤レンガ公開ポートフォリオオーディション……公募による作品（ポートフォリオ）をプロの審査員が評価。一次審査、最終審査とも一般公開で行われ、最終審査では勝ち残った5名がスクリーンに自分の作品を投影して審査員にプレゼンテーションを行った。グランプリ受賞者は個展開催などの権利が与えられた。
- 公開ポートフォリオレビュー……写真家志望者や写真愛好家が、写真界の第一線で活躍するレビュアーから、作品のコンセプトや撮影技術、プレゼンテーションの見せ方などについて1対1でアドバイスを受けた。
- 写真インディペンデンス展合評の集い……無審査の展覧会で1.8m×2.25mの壁面が作品発表の場として提



写真の町東川賞授賞式

供される。合評の集いでは、出展者がゲスト写真家らの前で作品について発表し、ゲストを交えて作品やテーマの選び方などについて活発にトークが交わされた。

- 思い出写真館「NIJI」……フォト・フェスタに訪れた家族やカップルを対象に、写真甲子園のOB・OGたちが記念写真を撮影してプレゼント。撮影した写真は東川町郷土館前に展示した。
- 撮って楽しい、体験して楽しい、ひがしかわ撮影会……東川の豊かな自然風景を撮影しながら、講師や他の参加者との交流を楽しむ撮影会。大雪旭岳源水を使つてのコーヒータ임もあり、撮影終了後はプリントした写真を見ながらの講評で盛り上がった。
- 写真と音楽のコラボレーション……羽衣公園に設置した大スクリーンで、写真の町東川賞受賞作品や写真甲子園のスライドを上映しながら、ステージ演奏とのコラボレーションを繰り広げる。2017年は、南米エクアドルの先住民によるグループ「RAYMIS」が演奏した。
- 東川町フォトミーティングプレイス……フォト・フェスタ参加者が、ゲストや写真業界関係者などとともに、世代や立場を超えて交流する場。
- 写真展……屋内外を問わず町内のさまざまな会場をギャラリーとして、展示が行われる。地元写真愛好団体「東川フォトクラブ」や、地元の子どもたちで構成する「ひがしかわ写真少年団」による写真展も催された。

志の高いボランティアが全国から 集いOB・OGとしても活躍

全国から志の高い若者がサポートスタッフとして集うのも、フォト・フェスタの特徴だ。通常はプロが行う展示作業などを経験するこのボランティアスタッフを、「フォトフェスタふれんず」（通称フォトふれ）と呼んでいる。

フォト・フェスタでは、歴代のフォトふれ経験者たちによる「フォトフェスタふれんずNEXT PROJECT」も展開されている。フォトふれOB・OGの有志が約1か月間東川に滞在して作品を制作しその成果を発表する「東川アーティスト・イン・レジデンス作品展」、フォトふれOB・OGによるグループ展、プロジェクトメンバーによるスライドショーなどだ。

フォトふれとしての経験は、多くの若者にとって人生を変えてしまうほどの力があるという。彼らはその後もそれぞれの分野で活躍するとともに、OB・OGとしてことあるごとに東川を再訪し、新しい形でフォト・フェスタを支えている。写真甲子園OB・OGもそうだが、「写真」という



1994年に始まった全国高等学校写真選手権大会「写真甲子園」

キーワードが強い絆の交流人口を創り出していることは間違いない。

フォト・フェスタを立ち上げた当初、当然ながら東川町は写真の町としての実績も写真に関するノウハウもなく、まさにゼロからのスタートであった。矢ノ目さんも、「当時のことは直接的には知りませんが」と前置きしつつ、次のように語ってくれた。

「写真業界に何もネットワークがない中で、当時の助役や担当者が何度も上京して省庁に協力を求めたり、写真関係の雑誌や企業を回って協賛をお願いしたり。かなり苦勞もし、多大なエネルギーを費やしたのではないのでしょうか。」

こうした先人の努力もあって、現在では名だたるカメラメーカーやフィルム・関連機器メーカーなど数多くの企業がフォト・フェスタに協賛している。また、外務省や環境省、北海道などの国・自治体、日本写真協会や日本写真家協会などの団体、各報道機関なども後援者に名を連ねる。文化庁などによる助成も受けている。

初戦審査・ブロック別審査を経て 18校が東川町での本戦審査に進出

次に、高校生による写真の全国大会となる全国高等学校写真選手権大会（通称「写真甲子園」）について紹介しよう。この催しは、「写真の町宣言」10周年を記念して1994年から始まった。「10年の歩みの中で、写真業界とのつながりもできた。こうした蓄積を踏まえて、写真文化に新たな貢献を考えていきたいという思いがありました。そこで、次代を担う高校生に活動の場を提供しようということになったんです」と矢ノ目さん。通常の写真コンテストは作品を送ってもらって審査するだけの取組みだったが、チームとしての競技性を持たせたことで一気に注目度が高まった。

開催方法は、次のようなものだ。全国の高校の写真部やサークルから、各校共同制作による組写真（8枚組）の作品を募集する。まず初戦審査については、郵送応募の作品を、立木義浩審査委員長をはじめとする審査委員が審査し、ブロック審査会進出校を決定する。審査に際しては、「心（テーマ性）+技（技術力）+眼（表現力・独創力）」という独自の観点を重視する。

ブロック審査会は、北海道、東北、北関東、南関東、東京、北陸信越、東海、近畿、中国、四国、九州・沖縄という11のブロックごとに、一般公開で行われる。選手たちは審査委員の前で初戦応募作品の制作意図やアピールポイントなどをプレゼンテーションし、講評を受ける。

こうして選ばれた18校の各校3人の選手と顧問の先生



「写真甲子園」は全国の高校生の出会い・交流の場ともなっている。

が夏の東川町に招待され、本戦大会を行う。本戦大会の舞台は、東川町のほか旭川市、美瑛町、上富良野町、東神楽町という、北海道を代表する雄大で美しい景観が広がる1市4町のフィールド。試合＝撮影の期間は3日間で、この間毎日指定されたフィールド内で、定められたテーマ（例えば「人」「自然」「暮らし」「笑顔」など）に沿って撮影を行い、チーム内でセレクト会議を行って8枚の組写真に仕上げ、1日ごとに審査委員の講評を受ける。そして最終的に、優勝、準優勝各1校などが選ばれる。

写真甲子園が出場校から高く評価されているのは、何よりも「3日間にわたって毎日審査を受ける」という仕組みだ。高校生が、日本を代表する一流の写真家から「どこがどう足りないのか」厳しくも温かいアドバイスを受け、それを糧に翌日の撮影に挑む。そうした中で、1日ごとに成長していく姿が目に見えるようで、顧問の先生も驚くほどという。

刺激と興奮に満ちた日々を東川町で経験した選手たちの多くは、写真を長く続けたいという思いを抱く。矢ノ目さんによると、その後さらに写真の道を追求して、新聞社・雑誌社のカメラマンや編集者になったり、フリーのカメラマンになったり、写真館に勤めたりしている人が少なくないとのことだ。

多様なボランティアスタッフが 町ぐるみで出場選手をサポート

選手たちはこの3日間を中心に、6泊7日のスケジュールで東川町に滞在する。1日目はオリエンテーション、2日目は開会式や歓迎会とホームステイ、3～5日目が撮影で5日目の最後に表彰式と閉会式、6日目はフォト・フェスタなどへの参加、7日目に解散という日程である。

大会期間中は、撮影場所までの移動手段、宿泊場所となるコテージ、食事など、すべて主催者側が用意する。それだけに、たくさんのボランティアによる支えなしには大会が成り立たない。幼児センターのエスコートキッズ、ハーブフレンドの会、歓迎夕食会ボランティア、炊き出しのJA女性部・商工会女性部・消費者協会・自治振興会・日赤奉仕団、ホームステイボランティア、写真甲子園OB・OGボランティア、企業ボランティアなど、まさに町ぐるみで運営していると言っても過言ではない。

フォト・フェスタと同様、写真甲子園についても軌道に乗せるまでの苦勞は相当なものがあったようだ。1回目の開催にあたっては、全国の全高校に案内文書を送ったほか、カメラ雑誌に告知記事を掲載。次第に他の関連企業もPRに協力してくれるようになり、熱戦の様相がテレビや新聞で報道されることも増えていった。1回目の参加校



高校生らしい創造性や感受性の育成と活動の向上にも寄与している。



東川町写真の町課・矢ノ目俊之課長

は163校であったが、2017年の第24回はその3倍以上に上る526校が参加した。

また2017年は、写真甲子園にとって特別な年となった。この取組みを題材とする映画「写真甲子園 0.5秒の夏」が制作され、11月に全国公開されたのだ。写真に青春を捧げる高校生たちの熱い姿を描いた物語。「東川町を全国の人に知ってもらいたいし、写真甲子園をさらにメジャーなものにしたい」と、町が主体となって制作された。

矢ノ目さんは、「今年は、学校や企業に協力してもらって地域上映を重ねる草の根運動に取り組んでいきます。希望があればぜひ海外でも上映したい」と話す。

海外といえば、「国際版「写真甲子園」」とも言える催しが2015年から始まった。高校生国際交流写真フェスティバルがそれで、東川町と交流のある国・地域から選抜された高校と国内選抜校が東川に集い、町内の魅力的なビュースポットを巡りながら撮影会を行うという趣向だ。こちらも3日間にわたって撮影を行い、国内外の審査員による審査で各賞を決定する。2017年の第3回は、中国、韓国、台湾、タイ、ベトナム、ウズベキスタン、インドネシア、オーストラリア、カナダ、ラトビア、アメリカ、ミャンマー、マレーシアの13か国から各1校が選抜された。

30年の歴史を踏まえて

2014年に写真文化首都宣言

「写真の町宣言」から30年を経た2014年3月6日、町は新たに「写真文化首都宣言」を発した。宣言は、「30年にわたる『写真文化』への貢献は私たち住民の大きな誇りになっています」としたうえで、次のように記す。

「おいしい水」、「うまい空気」、「豊かな大地」を自慢できる素晴らしい環境を誇りにする東川町が、30年にわたる「写真文化」の積み重ね、そして地域の力を踏まえ、開拓120年の今、私たちは未来に向かって均衡ある適疎な町づくりを目指し、『写す、残す、伝える』心を大切に写真文化の中心として、写真文化と世界の人々を繋ぐ役割を担うことを決意し、ここに「写真文化首都」を宣言します。

ここには、小さな町が30年の長期にわたって写真文化を支えてきたという自負とともに、写真によるまちづくりの意図するところが町全体に浸透してきたという確信、そしてさらにこの理念を町民とともに強固なものにしていきたいという決意がうかがえる。実際に、「写真映りのよい町」を目指すという目標は、着実に実現しつつあるようだ。

例えば、「東川風住宅設計指針」を定め、大雪の山並

みと調和するゆとりとうるおいのある住宅景観の形成を推進。植栽・壁・屋根などが同指針に沿って建てられた住宅については、カーポート等の設置に関して一定の補助を行っている。街路灯なども景観とのマッチングを重視してデザインされ、町の中にもできるだけ樹木を増やすよう配慮している。

全国で深刻となっている空き家問題も、ここではそれほど顕在化していない。商店街の店舗は、空いてもすぐ次の入居者が現れる状況だし、民間のアパート・マンションは500棟ほどあるが稼働率は約99%に達するとのこと。

最初に述べたように、東川町は1990年代後半以降人口が増加傾向に転じた稀有な町だが、実は定住促進にそれほど重点を置いているわけではない。より力を入れているのは交流人口の増加であり、それが町民や町職員の意識改革やモチベーション向上につながるし、また結果的に定住人口の増加にも結び付けばいいという考え方だ。職員については、アーティスト、民間人、外国人など、さまざまな「外の人」と触れ合うことで、慣例主義や縦割りの発想から脱却し、新しい発想やチャレンジ精神を身につけることが期待される。また、写真甲子園や高校生国際交流写真フェスティバルのように、若いうちから幅広く多彩な交流の機会が用意されていることは、東川町の未来にとっても大きな意義を持つに違いない。

また、町には日本語の専門学校があり、主に東アジアや東南アジアからの留学生が200人ほど滞在している。これらの留学生に加えて、短期の留学生や職員・スタッフもあり、彼らも重要な交流人口だ。

交流人口ではないが、「ひがしかわ株主制度」を利用した“東川ファン”も確実に増えつつある。これは、ふるさと納税の制度を活用して1口1000円以上の寄付をした人を株主に認定し、来町の際にはさまざまな特典がつく仕組み。株主の数は2018年3月末現在2万3061人に達しており、納税額も右肩上がりに増えている。

写真文化首都としての今後の課題や展望について、矢ノ目さんは「写真が人々の生活の中に身近に存在するようなあり方が大切」と強調する。撮る楽しみ、見る楽しみ、撮られる楽しみ、飾る楽しみ……。写真にはさまざまな楽しみ方があり、また撮るという部分に限っても一眼レフからスマホ、さらには復活の兆しがある「写ルンです」やチェキまで、そのツールは極めて多様化している。「写真は楽しいものだということをより多くの人に実感してもらうための提案をしていきたいし、写真好きの人が長く写真と付き合っていけるようなきっかけづくりをしたい」と、アイデアは無限のようだ。